

つと程度の高い学問を教える塾（学校）は、東京にいくつかあったが、貧乏のどん底にいる健次郎が、そんな塾には入れるはずもなかった。

科学にめざめる

このようにして勉強に励んでいたある日、健次郎は先生に呼び出された。

「山川。先ほど政府から使いが来て、お前が海外留学生に選ばれたから、明日役所へ来るようにとのことだ。大へんめでたい。すぐ仕度にとりかかりなさい。何でも、北海道開拓のために勉強させるといふことだ。この機会にいつしようけんめい学問に励みなさい。」

健次郎は、この降つてわいたような話に驚いた。

「はい、力の限りがんばります。」